

ママ先生

(幼児との生活の中から)

江 成 静 江

はじめに

私が、昭和三十三年に、五年間過ごした城東幼稚園を辞めて、家庭に入り、やがて子どもも生まれて、その育児や家庭づくりに一生懸命だったとき、日頃、人一倍丈夫だと思っていた主人が、突然胃癌の宣告を受けて入院した。

それは同時に、半年先の死の宣告でもあった。あまりにも唐突であった。

新しい生命の誕生と、働きがりのたくましい生命が、あえなくこの世から消え去ってしまうという二つの現実。

私は、大きなショックを受けて、しばらくの間、何を、どう考えてよいのかわからなかった。ただ、あるがままを、見るがままを、その驚きと苦しみの中に見つめて、耐えた。

こうして昨年の七月、私は主人をうしなひ、生後一年二か月の

女の子と二人きりになってしまった。

昭和三十六年八月、東京都選考試験。

同年九月、城東幼稚園に再び奉職。

さて、私は再び、幼児との生活に入った。

わずか二年半の間に、何か整理のつかない、非常に印象の強烈なくつかりの経験を持っていた。

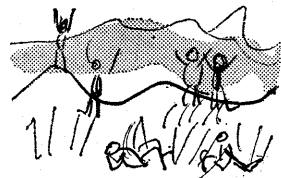
私の子どもを観る目が、確かに変わった。

子ども達は、何も知らない。ただ新しい先生を迎えた。

* * *

庭で遊んでいた子ども達の中から、四才児が二人、私の方に走ってきた。

「何か言いつけにきたな」と思って、こちらからも近づいてい



く。

「えなり先生にいい。あの先生は、なかなか、やかましいから」

「うん、そうだな」

きこえてきた会話に、私は思わず苦笑しながら、

「どういう御用ですか？」

と聞いて待ちうけた。

子どもが二人で顔を見合わせて笑った。

「小さい子が、スベリ台の、すべる方からのぼってきちゃう

の」

「ねえ、いけないでしょ？」

「上からと下からじゃあ、しょうとつしてしまいわね。危いあ

ぶない。教えてあげなさい」

「はい」

子どもは、一般にいいつけぐちが好きだけれど、特別、きき役に指名されるとは……、ちょっと考えてしまう。

最近、自分の子どものことを、あれこれ気をつけるせいか、確かに先生としてより、母親のごとにちかく、こまかいところを注意するからではないかな

たとえば、

「クレヨンをしまってから、次の遊びをするんですよ。かきつ

ばなしはいけません」

「コップを流しの、水が流れてくるところにおいたら、汚いでしょ」

「給食のおかわりをするときには、残さないように、前のときよりすくなくつけていただきなさいね」

といった具合。

やかましい、子ども達は、そんな感じを、巧みにとらえているものだ。

* * *

「幼稚園の先生はたいへんですね。

家では、ひとり子どもでもあましてしまいますのに」

よく、おかあさま方が、こんなふうにおっしゃる。

私も、そう思うことがある。

しかし、子ども達は、適応することがうまい。幼稚園と家庭、先生とおかあさん、お友達と兄弟、これらの違いを知っているのだ。或いは、無意識であるかも知れない。けれども子ども達は、その相手に、雰囲気、敏感に順応しているように思われる。

机の上に、給食のおぼんと食器が一組のこつている。

「ごちそうさまをして、片つけていらっしやい」

廊下の隅にいた子どもをみつめて言った。

すると

「先生、ぼくね、おしっこ、いやなの、がしたいんだよ」

と困った顔つき。

「そうだったの。紙を持っているの？」

「あるよ。」

だけどぼく、この先生に、おしりふいてもらうの恥ずかしいよ、恥ずかしいから、いやだよ」

早くあっちへいってしまえと、完全なノックアウトを喰らって、私は考えた。

「子どもを恥ずかしがらせるようでは、まずいな。何でもいえるような、受け入れ体勢をつくらなくては」

そのあとのこと、

「ぼく、学校のお便所、きらいだよ」

「そうね、おうちのお便所の方がいいわね。でも、どうして、先生のこと恥ずかしいの？」

「だって——」

「先生も、おうちに帰ると、あかちゃんがいて、先生のことをママ、ママっていうのよ。」

おうちでは、いつも先生があかちゃんのおしりをふいてあげるのよ」

「え!? ママ!

なんで、ママっていうのだよ。

先生のおうち、学校じゃあないの？

あかちゃんどこにいるの？」

それから、私の顔をまじまじとみて、

「ママのせんせいなあ」

といった。

先生だからいえること、母親だからいえること、子どもは、それを感ぜわけている。

* * *

私は、帰宅して子どもの面倒をみながら、母親というものの気持を味わう。味わいながら、幼稚園の子ども達のことを想い出す。

叱られたり、ほめられたり、なだめたり、はげましたりしながら、くり返しくり返し生活に必要な、よい習慣を身につけていく。その子ども達の顔を想い浮かべるたびに、何か、*“けなげなもの”*を感じる。

自分の子どもが、やがて幼稚園にいったとき、果してあんなふうに、集団生活が出来るだろうか。

いかに安全な、幼い子ども達の集りとはいえず、それはもう立派な社会である。そこには、きまりもあれば、制約もある。数々の新しい刺戟がまわっている。

そこに、たとえ短時間ずつでも、ひとりだちして過ごしてくる
ということは、親にとって、身のひきしまるようなおもいであ
るまいか。

色紙で、一生懸命、花をつくっている。

登園したら、他のグループ遊びに入る前に、自分自分で花を一
輪ずつつくることにしましょうと、昨日からの約束であった。

五才児は、わからないところを先生にききながら、せっせと自
分の仕事を片づけていく。

「先生、このところの、とめ方を教えて」

大事そうに、つくりかけの花を持った大きい男の子が、私に近
づいてきた時だった。

三才児の甘えん坊が、ぱっと、その間にとびこんできた。

手に持っていた赤い花が、とんで散った。

私は、だまって、このなりゆきをみつめた。

「ああびっくりした。」

狼かと思っちゃった」

「うふふ。ぼく、とらだよ」

「とらだつて——」

二人の子どもは笑いあった。

私はうれしかった。

子どもの中に、夢と思いやりがあったことを感謝したいような

気持だった。

全園児がわずか五十余名という都心の幼稚園であるから、一組
の編成で、その中には、三才、四才、五才の子ども達が混ってい
る。片時も、先生の傍から離れようとしない三才児がいるかと思
うと、先生のいいそうなことを先まわりしてしまってしまふ五才児
もいる。

集団の遊び、グループの遊び、そして、個々の遊びの指導。ま
たは、年令別、発達段階による遊びの指導。それから毎日毎日の
生活指導のいろいろなど。混合の一組編成の実施にともなう問題
は数知れない。

しかし、その中で、子ども達のやわらかい芽は、すくすくと、
美しい双葉をのばしていく。

先生と子どもの、子どもと子どもの心のふれあい、気持の通じ
あい、この積み重ねが、大切なのだと思う。

おわりに

「心に太陽をもて」

城東小学校の校訓である。

私は「先生」の心の中にも「ママ」の心の中にも、いつも大き
な太陽が輝いていて、つきることのない明るい恵みを、子ども達
の上に、ふりそそいでいかれるようにしたいと思う。